

母校とわたし

昭和学院高校 ▼▼▼

市川市街から北に車で10分。真間川のほとりに、佐川芳枝さんが通った女子校(当時)、昭和学院高校がある。

「卒業してお嫁に行く女の子も少なくない時代。作法には厳しい学校でした。生徒は教師を慕い、クラシックや歌舞伎、演劇など芸術鑑賞の機会もふんだんに与えられるような、のびのびとした学園生活を謳歌する学風だった。

美術部所属で梅原龍三郎やエル・グレコを好み、サリンジャーなど外国小説や日本の歴史小説を愛読する少女だった。「父親が読書好きで。小学生のころ『本を読むと目がきれいになるんだよ』と言われたんです。当時はっきり目がぱっちり

作家のおかみで寿司屋

文章書く喜びを知る

佐川芳枝さん(56)

に追われながら、朝の8時から深夜3時ごろまで働きつめた。本を読む暇もない、息詰まる毎日。「自分に自信がなかった」。10年続いた。

その中で、客に時候のあいさつなどの手紙を書き始めたことをきっかけに、文章を書くことをささやかな楽しみとしていった。ある日、偶然目にした週刊誌の投稿欄。店や子育てで見聞きたことに材を取り、短文を送った。結果は採用。高校時代の、あくなき好奇心が息を吹き返した。

一枚のわら半紙の新聞を週一度友人に配っていたんです。街角で見かけた人とか教師の似顔絵書いたり、癖をまねたり、面白おかしく書いたのは好評でした。卒業後生活は一変した。銀行などに勤めた後、25歳で東京都内の寿司店「名登利」の主人、佐川和宏さん(60)と見合い結婚。子育て



自著を手にする佐川芳枝さん＝東京都中野区東中野の寿司店「名登利」で

さんうちあけ話」を出版。「風通しの良い文章、読みやすく平易な文章を心がけています。エッセーでも

起ったことを事実そのまま書くわけではありませぬ。7割事実、3割フィクションくらいでないと人を楽しませる、ということができないんですね」

03年には少年が寿司屋での修業や商店街の人々との触れ合いを通して成長していく「寿司屋の小太郎」で、第13回椋鳩十児童文学賞を受賞した。著作は15冊ぐら在校生のころから作家になり。現在、少女を主人公にたいって言ってたわよね」55年ごろを舞台に、大人向と友人に聞いてびっくりしけの小説を構想中。自身が少女時代から見えた下町の風俗とその変遷を書き残しておきたいという。寿司屋のおかみさんとして、作家として。円熟の季節を迎えた今、自らの原点に一度、同窓会を開く。「こを思い起こす日々を送っているの同窓会で『あなた高い。』」

【中川聡子】

11にTDLオフィシャル売、長客ノリノリ

ステアリングも本物。新しい概念で訴えないと競 市況 19日